

(九〇分)

◆法学部の論述力について

この試験では、広い意味での社会科学・人文科学の領域から読解資料が与えられ、問いに対して論述形式の解答が求められる。試験時間は九〇分、字数は一〇〇〇字以内とする。その目的は受験生の理解、構成、発想、表現などの能力を評価することにある。ここでは、読解資料をどの程度理解しているか(理解力)、理解に基づいて自己の所見をどのように論理的に構成するか(構成力)、論述の中にどのように個性・独創的発想が盛り込まれているか(発想力)、表現のどの程度正確かつ豊かであるか(表現力)が評価の対象となる。

一 以下の文章を読み、著者のいう「つるつるしたもの」に対して置かれるあなたの言葉を選び、その言葉を選んだ理由を述べたうえで、「つるつるしたもの」とあなたの言葉の二つをキーワードにして自由に論じなさい。

昭和が終った。何か感想を書いたら、しきりに電話をいだけようになった。そう長い電話ではない。一七七番は天気予報の番号だが、その一七七番が逆にかかってくる、そんな気味あいの電話である。耳をすませていると、いろんなことを考えさせられる。

ウオーターフロントという言葉が使われるようになって、いつ頃からだったろう。はじめはこの言葉を耳にした時、ヘンな語感の言葉だなと感じたのを覚えていた。その時には、この言葉がこんなに人口に膾炙(かいしあ)するとは思わなかった。しかしいま考えてみれば、水べりをウオーターフロントと言いかえる、そこには、それなりの理由がやはりあったのである。

ウオーターフロントという言葉からぼくが思い浮かべ

るのは、何よりも、あのプールの水際である。それはタイルかそれと類似のものに塗り固められていて、つるつるしている。それは水を浸透させない。水を弾く。日本語で「水べり」、「水際」という言葉から思い浮かべられる情景は、全て、あの「汀」という言葉に代表されるような、陸(?)の部分に水が滲みとおる、あるいは土、砂と水がなじむ、そうした情景である。崖壁や運河におけるような「水際・水べり」水に隣接しながら、水を浸透させないイメージの水際を示す言葉は、これまで日本語になかった。

「静か」であれば「蟬の声」さえが「岩」に「しみ入る」この国に、静かであれ喧騒にみちてあれ、とにかく、つるつるして、水を弾く水際のイメージがひとの心を掴む理由が現れてきた時、この言葉は登場してきたし、人々の関心はそのような場所に向かうようになっていった。その順序は、逆ではない、と考えておきたい。

ところで、この水を滲みとおらせないつるつるしたイメージ、水に「なじまない」水際のイメージ、これはいったい何だろう。谷崎潤一郎は『陰翳礼讃』の中にこう

書いている。

(友人の——引用者) 娯楽園主人は浴槽や流しにタイルを張ることを嫌がって、お客用の風呂場を純然たる木造にしているが、経済や実用の点からは、タイルの方が万々優っていることは云うまでもない。たゞ、天井、柱、羽目板等に結構な日本材を使った場合、一部分をあのケバベしいタイルにしては、いかにも全体との映りが悪い。出来たてのうちはまだいっが、追いかく年数が経って、板や柱に木目の味が出て来た時分、タイルばかりが白くつるつるに光っていられたら、それこそ木に竹を接いだようである。でも浴室は、趣味のために実用を幾分犠牲に供しても済むけれども、廁になると、一層厄介な問題が起るのである。

京都や奈良の寺院の、あの昔風の、うすぐらい、いかにも掃除の行き届いた廁の風情は心をなごませる。漱石先生は毎朝便通に行かれるのを一つの楽しみに数えられ、それは寧ろ生理的快感だといわれたそうだが、それも「閑寂な壁と、清楚な木目に囲まれて、眼に青空や青葉の色を見ること」の出来る日本の廁」であればこそことだろう

う。関東の厠には床に細長い掃き出し窓がついている
で、虫の音や雨の音、鳥の音が聞かれる。おそろく古来の
の俳人は、ここから無数の題材を得ているに違いない。
「風流は寒きものなり」というのは正しい。ホテルの西
洋便所で、スチームの温気がしてくるなどは、まことに
いやなものだ。

ところで、谷崎は、普通の住宅で、こういう日本式の
厠を採用しようとして最も問題になるのは、便器だとい
う。厠を清潔に保つために、水洗式の浄化装置をつけ、
床をタイル張りにすれば「風雅」や「花鳥風月」とは全
く縁が切れてしまう。彼女がそんなに「ばつと明るくて、
おまけに四方がまっ白な壁だらけでは」漱石先生のあの
生理的快感もおぼつかない。そこで自分は、浄化装置は
導入したものの、自分の家にはタイルを一切用いないよ
うにした。そこで困ったのは、「便器であつた」というの
である。(中略)

この谷崎の言葉は、あの水を弾く、「つるつるしたもの」
が日本の生活にとり入れられる最初の例の一つが、厠の
「真つ白な磁器」だつたことを教える。「つるつるしたもの

それはまた、西欧の都市におけるような水際、均質な岩
盤の水への露頭としてのそれでもないのだ。それは柔ら
かいものをつつむ硬い殻に似ている。ウォーターフロン
トは、ほく達自身にたいしても、「つるつるとして」ほく
達の何かを拒む、そのような契機、存在として、おそろ
くほく達の心をひきつけているのである。(中略)
ほくは以前、ある場所で数年間受付事務に従事したこ
とがあつたが、あの透明な、あるいは不透明な窓口のあ
るなしが、そのような仕事にとっていかに大きな意味を
もつかに気づくことがあつた。他人の前に他人として現
れるには、まず自分にたいして他人にならなければなら
ない。「知らないふり」をするには、まず自分にたいして
「知らないふり」をしなければならぬのである。
谷崎にとって「つるつるしたもの」は陰翳を拒むもの
として現れ、谷崎はそれを拒む。しかしいまほく達に「つ
るつるしたもの」はやはり陰翳を拒むものとして現れ、
——陰翳はほく達の好むものであるにもかかわらず——
「ほく達はそれにひきつけられる。この違いはどこから
くるのか。ほく達はなぜほく達を拒むものにこそひきつ

けられるのか。

ほくはいまその理由をここで考えてみようとは思わな
い。考えてみたところで、出てくるのはどこかで聞いた
ような、そんな口吻^{くぶ}をまねがない物言いだけだろう。
ただ無言の電話などに耳を傾けていると、自分の中に、
あのウォーターフロントを感じる。それは液状地盤と水
を隔てる。しかしそれは水と水を隔てている一枚のつる
つるしたプラスチック板といつても同じことだ。
それは何かをせきとめているのではない。その板をは
さんで水位差のあるものが隔てられているというのでは
ない。水位差は同じ。板をとつても水は流れない。ただ
そこに一枚のプラスチックを置く。自分が、そのプラス
チックであるように感じるのだ。
数年間日本でないところに生活して感じたのは、「知ら
ないふり」の効用ということだつた。文化というのは、
「知らないふり」をすることではないか。その「知
らないふり」がどれだけ「知らないふり」として許容さ
れるかが「文化」の目盛りではないか。そんな感想をも
つた。

の」は、その最も対極性の強い場所に現れ、しかも谷崎
のような感受性の持主には、「あまりと云えば無幾千
万」、「見える部分が清潔であるだけ見えな部分の連想
を挑発させる」ものと感じられたのである。(中略)

八〇年代後半の日本の大部分の住民が、なぜ「ウォー
ターフロント」にひきよせられるか。「つるつるした、水
を弾く」こうした水べりに心ひかれるか。あの湾岸道路
から望まれる東京のウォーターフロントは、最初日本人
の生活に厠の「真つ白な磁器」として現れたものの拡大
した姿なのかも知れないなどと思つてみる。そこでは「見
える部分が堅固でつるつるしているだけ、見えない部分
の連想を挑発する」。たとえば、西欧の石造りの古来から
の都市で、最近になつて「ウォーターフロント」に人々
が眼を向けはじめたなどという話をきかない。ほく達は、
自分達のいる場所がやがてくる大地震に「液状化」して
反応する地盤の上にあることをうすうす感じればこそ、
あの、「つるつるした」「硬い」ウォーターフロントにひ
かれている。ウォーターフロントは、たしかにあの陰翳
にみちた場所、水を滲みとおす水べりではない。しかし

カナダにいた時、ある女性と離婚した男性が、そのかつての妻と新たに結婚し、さらに離婚した男性と、ある集まりで隣りあわせる場面に出くわったことがある。その場にある緊張が流れたが、皆が「知らないふり」していった。やがて二人がその女性の話をはじめた。彼らは「知らないふり」してその女性の噂をし、その女性との離婚のいきさつを話し、皆が「知らないふり」してそれを聞いた。話されることを避けられた話題はなかった。しかし皆が「知らないふり」して、「知らないふり」することで、何をも避けなかったのである。

人体で最も広い、のっぺりした部分は実は背中だということだ。ジイドがいうように「去っていく人は背中しか見えない」。去っていく人が背中しか見えないというのは、何と人性のしくみに含致した事実だろうか。

「せなで泣いてる唐獅子牡丹」。時にひとは、その背中の空白に耐えきれずに、背中に紋様を刻み、背中に語る。背中の空白そのものを陰翳にする。しかし背中はやはり空白のままがいい。それが、背中の効用なのだ。

〔出典〕 加藤典洋『背中の効用』（一九八九年）〔同〕天

皇崩御」の図像学』（平凡社、二〇〇一年）所収